

『教育技術』一九五四年一月（教育技術連盟編／小学館）

### ■社会科の改善とクラブ活動

## それぞれの立場をみつめる

矢口 新

#### （一）クラブ活動について

「社会科の改善とクラブ活動」というこの主題は、「社会科の改善」「クラブ活動の改善」という二つの主題に分けて考えた方がよさそうである。「と」という接続詞で結びつけるのはいささか無理であろう。事実ここに意見を述べて居られる二人の先生方もそれぞれの問題として論じて居られる。この二つは成程共に新しい教育の理念から生まれて来て、その点で基本的な立場を同じくするものであるが、その具体的なあり方については非常に異った点がある。一方の不足を他方で補ったり、他方が改善されると、一方も必然的によくなるというように考えられない。

同じ平面上のことと考えられてはならないであろう。

社会科というのは、「社会」について研究させる教科であり、クラブ活動というのは、字の通りクラブであって、個人個人がもつ趣味教養を中心にしてそれらの自発的な集りにより、楽しい雰囲気をつくり、それにより個人の中に自分の趣味教養を育てる情操と態度を養うのである。いわば、個人の中に自分の夢を育てていく気持を植えてつけるのである。決して教科の延長ではなく、目標が異なるのである。

もちろん趣味教養といっても、内容があるわけであるから、社会のことについてのクラブがあつてもよいが、その場合も、決して社

会の研究をするのがクラブの目的でなく、むしろそういう気持を育てるのがクラブの目的である。だから、クラブ活動では内容に関して、これこれのことをしなくてはならぬというような内容的な計画は不要である。それは個人の自由にかされる。このように、クラブと教科のはっきりした区別を考えておくことは、教育課程を考える場合大切なことで、こういうそれぞれ異った方向から教育活動がなされて、人間のもつ様々な面がみがきあげられて行くのである。クラブも教科も区別がなく、いずれも内容を学習することに重点をおいてやると、結局クラブは教科の延長になって、何故特にクラブという課程において学習しなくてはならないか、わからなくなってくるのである。学習とは内容のそればかりでなく、人間性の学習も考えられるのである。その区別がつかないと教科でやったらよさそうなものだというように自己矛盾に陥るのである。

られなくなっている。いや観念的にはその区別は考えられても、行動となると、教科書を教えるような方式以外の行動ができなくなっているのである。これをまず反省してかからなくてはならぬ。クラブで先生が一生懸命やっておられるのを見ると、一生懸命になればなる程、教科の学習になつてしまつて一番大切なもの、クラブで時折会合して楽しい時をすごし、あ今日はよかつたなというほのぼのとした情感を育てることが出来なくなっている。

宮地先生がきゆうくつに考えるなど指摘されている点は、誠にその通りであつて、形式から先にきめてかかるということが、クラブの本質を理解していないことなのである。本質的にそういう形式をもたないのが自由なクラブの集りなのである。チャール・クラブというようなあの自由な雰囲気や親しむ所の、形式を打破したものでなくてはならない。だからやりやすい所からやるという宮地先生の言う通りであると思う。ただこの場合先生が教えやすい所からやるというわけで或る内容について

の専門家の先生がいるからその内容を教えるといった考え方で内容を教えるクラブにならないように注意することは言うまでもない。

そういう基本のことをしっかりと押えていさえすれば、余りやかましくいわないでもよいではないか。あとは生徒が自由に楽しめるように環境をつくってやるのが大切であって、その点についても宮地先生が、具体的に懇切に言っていて居られる通りである。私はすべて賛成である。とくにその中で大切なことは、教師のことであろう。教師の指導が、学校で千べん一律になつてはいけけないことは、前にも述べた通りであるが、クラブでは教師もクラブの一員になつて、生徒と一緒に遊んで欲しい。教師に能力がないなどというが、能力がない素人のあつまりでクラブが出来ているほうがより面白いではないか。お互いに失敗しつつ興じ合うことがあつてよいであろう。

教師の能力が足りないというのは、むしろ人間的な面白味が欠けているということであろう。そういえば教師の間にも何かクラブがあつてもよいと思うが、日本人にはそ

ういうものがなかなかピンと来ないらしい。教員室もしかつめらしい事務室でなく、サロンのようになり、お茶やコーヒーをすすりながら、笑いに興ずるといふようになって、生徒に対してもクラブの面白さを体得させられるようになるのではないだろうか。

そういう雰囲気が生徒の心の中心に育つていけば、豊かな、人間的に中のあるそうして自己の趣味教養を守りそだてようとする生徒が育つて行くのではないだろうか。

## (二) 社会科の改善

「社会科の改善」問題が起つているのは、さまざまな解釈があるけれども、究極において、現実の社会科が極めて、期待に反しているという所にあるといわざるを得ない。だから社会科の理念は誰も否定し得ないのである。その事は石川先生も述べられているように文部省といえども、これを育てようと言つていたのである。火のない所に煙はたたぬというのが今の社会科の弱さが、問題になるのである。これは何人も認める所であろう。だ

からもろもろの問題を逼塞せしめる所以は、社会科が期待通りのものになることである。これにはどういふ方法が考えられねばならないか。

社会科の弱さは、「社会」を子供に理解させることがはつきりとしていないことにある。「社会」を理解させるには、現実の社会の現象を取扱つて、それを材料にして「社会」といふものの性格をはつきり分析整理して行くことが行われなければならぬが、それが行われていない。教科書をみても、お伽話のようなものが多いのである。また交通についての学習などというものをみると、小学校でも中学校でも交通機関の形とかスピードとかいつた学習をしているのが多い。そうでなくて、大切なことは交通のあり方が社会によつて異なる、現代社会は発達した交通を基礎にして成立つていくということ、政治、経済、文化その他がいずれも発達した交通の上に成立つていく、封建社会はこれこれこういう社会であるからその交通の様式はこれこれであつた、というような社会の性格が問題なのである。

社会は生産、流通、政治、交通、保健のさまざまな領域において、具体的にその姿をあらわしている。この現象を具体的にとらえられて、社会の具体的なあり方を理解して行くのが社会科である。抽象的に社会はこうであるなどというのではない。

今の社会を具体的問題にしようとするれば、それはどうしても、どういふ地域にある社会が、どういふ自然条件の下にということも問題にしなくてはならぬ。地域社会を取扱つても、その中の産業を問題にするのに、ただそこだけをみていたのでははつきりつかめないのであつて、他の地域社会と比較したり、その関係を明らかにしたりしなくてはならぬ。ここに空間性の問題が出て来る。

また今の社会の姿を明らかにするのには今でない過去の社会の姿を明らかにしなくてはならぬのである。たとえば、先にのべた交通の現象を通じて社会をみる場合も今の社会ではこれこれであつて、農村であつても多くの他の地域と密な交通を行つて成立つていくが封建時代は自給自足であるから、

そうではなかったというように収められて、はじめて過去の社会と今の社会がはっきりするのである。このように衣食住でも、政治でも生産でも、いずれも社会を明らかにして行く場合に、過去のそれと比べて、差異を明らかにする。いわば過去から今に至る社会の類型を明らかにするのである。こうして歴史性の問題が出て来るのである。

空間性(地理性)、歴史性は共に社会の学習が現実的に行われることにおいて成立つのである。それは社会学習の問題に応じて、問題史的に、問題地理的に、くりかえし、くりかえし取扱われて行くのである。

ところが教育の素人は、今の社会科の弱さを補うものとして、地理と歴史を考えると、あの過去の地理ならざる地理、歴史ならざる歴史を思い起す。過去のこれが、イデオロギーにどうのというのでなく、あれは決して、歴史ではなく、単なる物語りであって、紀元何年などと年代だけはのべてあるが、一つの時代の物語りであって、アンデルセンの物語りに筋が

あるのと大して差異がない。それには社会が語られていないから、時代という観念が養われない。要するに物語であって、歴史意識がないから歴史でないのである。また地理も同様であって、地図をみて地名や山河の名前や気候などを羅列して書いてあるが、社会が描かれていないので、単なる国書である。こういうものをすぐ教育の素人たる官僚が考える所に日本の教育を発展せしめない原因があるのである。

しかしこういう「社会」の学習を現実に行っているかという残念ながら、現在はそうはいえないのであって、これを教師が現実に成立させる以外この問題をとくかぎはないのである。そしてこの問題は、指導要領の改訂も一つの要素ではあるが、教師が自らの力で地域社会の現実をみ、それを理解するだけの素養が出来て来なくてはならぬのである。観念的な、言葉による社会の把握でなく、社会現実の構造的把握である。

これには時間をかけた教師の研究と実践が必要であろう。多くの教師の協力ということも必要であ

ろう。更に教育委員会や文部省による資料の提供ということも必要であろう。こういう方向への努力によつて、具体的に教師が活動出来るように施策が進められねばならぬ。

石川先生や宮地先生が、心配されていることは誠に尤もであるが、大切なことは、教師自身が、われわれはかくするが故に、文部省はかくの如くして欲しいという具体的な施策を教師の側からどしどし提出することである。ただ文部省を批判していたり待っているだけではいけないのである。それが教育者の自立性というものである。文部省はただの官僚でしかないことを、教師が確認しなくてはいけない。教育の専門家ではないのである。